

「雲南知青大返城」運動における 個人知青像

—「知青」としての陸融の書簡を中心に—

遊 又

はじめに

毛沢東夫人・江青をはじめとする、いわゆる「四人組」が失脚した1976年10月以降、中国共産党中央は「撥乱反正¹」という基本方針を採用した。「文革（1966-76年）」を含む長い間、農村部や辺境地域に下放された1600万人にも上る「知識青年²」（以下、知青）は、厳しい環境に耐えきれず、生まれ育った都市に帰還することを求める声が「撥乱反正」が始まった直後に全国的に高まった。

1978年5月24日、中国国務院は「関于工人退休、退職的暫行弁法」と題する文書「国発〔1978〕104号」を公布した。この文書によれば、国营工場の職員の退職後、その「上山下郷³」（以下、下郷）を遂行した子供たちは、親の仕事を「頂替⁴」で引き継ぐことが許された。この方針の下で、多くの「知識青年」の家族が子供たちを辺境や農場から連れ出す手段としてこれを活用し始めた。その時点で、雲南生産建設兵団の知青たちはすでに農場の生活に対する疲れを感じており、「下郷」政策は崩壊寸前であった。

しかし、「104」号文書が発布された時点で、雲南農場には約5万人の知青がいた。文化大革命の余波を前にして、彼らはどのような手段で「上山下郷」政策の封鎖を突破し、無事に都市へ帰還することができたのか。これは果たして一つの集団意志の推進に基づいているのか、それとも個人行動の集中的な表れなのか。また、「返城」を求める過程で、知青たちはどのような心理的な波を経験したのか。本研究は、一人の普通の上海知青、陸融の書簡を通じて、彼が記録した「返城」に焦点を当て、上記の問いについて考察する。

「雲南における知識青年の大規模な都市への帰還運動（以下、知青大返城）」に関する専門的な研究の中で、張衛の研究は代表的なものである。張（2008）は、なぜ雲南が全国的な「知青大返城」の始点となったのかを解明しようと試み、この運動の内在的な動機を説明するとともに、上海出身の知青、丁惠民が主導した一連の知青請願活動の全過程を詳細に記録している（張 2008）。張衛は、知青が

都市への帰還を要求する理由を、「上山下郷」が露呈した深刻な諸問題に起因するとしていくつかの点を挙げている。①知青が農村で労働分配や食糧分配の問題に直面している。②教育を受ける権利を失っている。③社会が知青問題について様々な議論を交わしている。張の研究は、これらの点を総合的に分析し、雲南地域における「知青大返城」運動の特異性とその後にある社会的な文脈を明らかにすることを試みるものである。

一方、張（2018年）は、知識青年のアイデンティティの問題をミクロ的な視点から探求し、インタビューを通じて彼らのアイデンティティの形成と変化を分析している。この研究は、知青のアイデンティティ形成の積極的な変遷に焦点を当て、農村滞在と都市帰還の両過程におけるアイデンティティの変容を探るものである。

「知青大返城」関連の先行研究において、張衛を含む多くの研究者は、知青たちのストライキや絶食などの抗議活動を、共通の目的によって推進される集団行動として整理している（李 2006; 金 2014）。その中で、事件全体は数万人の知青が都市への帰還を目指して集結し、指導者を擁し、組織化された集団として政策に対抗し、最終的に目的を達成した過程として描写されている。だがこのような描写は、この事件を知青の「反抗運動」として定義する傾向が強く、知青たちが「抗争」を経て「返城」しなければならないと指摘する。この一元化された記述と分析は、雲南の知青のイメージを過度に単純化し、知青たちに存在する多様な思考、矛盾、感情などを無視してしまう可能性がある。本研究で議論される知青・陸融は、都市への帰還を非常に望んでいたものの、いかなる抗議活動にも参加せず、極端な行動をとることもなかった。彼が両親に宛てた手紙を分析することで、我々は都市への帰還を切望しながらも、別の方法を選んだ「普通」の知青、および他の知青とは異なる内なる葛藤と衝突を垣間見ることができるかもしれない。

このような経験は書簡という媒介によって記されている。2009年、上海知青が雲南での「下郷」8年間に両親に送った223通の書簡が出版された。それは陸融（1953年生まれ）の家族への家書である。陸融は上海における一般労働者階級に生まれ、また祖母、父、母、兄、弟と合わせて6人家族であった。1969年、陸融は上海の中学校を卒業し、そして1970年5月に雲南の橄欖壩農場⁵へ「下郷」し、1979年1月まで家族と頻りに文通を交わしていた。これらの書簡は、上海社会科学院の研究者であり、陸融の同僚である沈志明によって編纂され、『一个上海知青的223封家書（一名の上海知識青年の223通家書）』（以下、陸融書簡）として刊行された。内容は約50.5万字に及ぶ農場生活の記録である。

書簡は社会の記憶の運び手として、その軌跡を反映している（莫里斯 2002）。

また、David and Hall (2000) によれば、書簡は社会的実践としての研究が有意義であり、内容、著者、そして描写される社会状況を通じて、「手紙を書く」という行為の社会的役割を解明することが推奨されている。陸融の書簡では、「上海への帰還」に関する内容がかなりの部分を占めており、公の記録とは異なった「下からの視点」から個人レベルでの帰還への切望と農場知青の多様な精神的苦境が綴られている。

以上のような問題意識を踏まえ、本研究では、「雲南知青大返城」運動の発生背景を整理し、知青の「返城」経験を考察した上で、包括的な知青像を描き出すことを目指す。具体的には、「陸融書簡」から「知青大返城」に関連する記述を拾い上げ、陸融の「返城」過程中的行動や思考の変化を分析する。その中には、陸融の個人的経験を「集団抗議」の中で位置づける試みが含まれる。ただし、「陸融書簡」に収録されず、または、あいまいな表現を補完するため、筆者が2023年8月19日に陸融と沈志明をインタビューした際の記録（以下、陸融2023、沈志明2023とする）も利用する。

I 「雲南知青大返城」運動

1. 抗議の背景

「上山下郷」運動において、「知青」の農場を離れる行為は、単なる地理的な移動に止まらず、感情や身分、人生の進路を選択する過程として捉えることができる。劉小萌は「当時、『兩招一徵』、すなわち『招生』、『招工』、『徵兵』と称される都市への移手段は存在していたが、これらはほぼ特権層によって独占され、『走后門⁶』という現象が盛んだった」と指摘している（劉2009）。沈志明はインタビューで「1971年の『林彪事件』の後、かつて冤罪を受けた中共のリーダーたちは徐々に名誉回復された。彼らが釈放された後、最初に行ったことは自らの子供たちを辺境や農場から都市に戻すことであった。しかし、普通の人々にはそのような手段が無かった⁷」と述懐している。

上述の「常規」の帰城方法に加えて、いくつかの「非常規」的な帰城手段、すなわち「病退（病気で退職）」と「困退（困窮で退職）」が存在している。本来、これらの政策は、実際に重い病気や怪我を負っている、または家庭が本当の困難に陥っている知青のために制定されたもので、彼らには「下郷」を免除されるか、「早期返城」することが許可されていた。しかし、その条件は厳格で、群衆評議を経て、関連部門の審査を受ける必要があり、病者は病院の病気証明を提出しなければならなかった。知青の心理安定に配慮して、「病退」や「困退」を許可し

た後、一部の地域では、関連政策について「文書なし、口頭で通知、内部で決定⁸」と特に強調されていた。したがって、このような「非常規」的な帰城手段も、一部の知青にとっては「走后門」の目標となっていた。

「上山下郷」期間において、雲南農場の知青は「返城」の機会を常に保有していたものの、その機会は一般の知青にとって極めて微小な可能性であった。後になってさえ、「病退」や「困退」の手続きも停止され、知青の希望は次第に絶望へと変わっていった。

1978年6月になり、「国発（1978）104号」文書の内容が農場内で広まると、既に自信を失っていた知青は再び「返城」の希望を見出すようになった。しかし、文書の具体的な内容や実施方法については誰も明言できず、全ては「流説」のレベルにとどまっており、目前の「希望」も同様に空虚なものだった。陸融は書簡の中でこれらの「流説」をこう描いている。

「頂替」「抽調」といった事柄が最近、農場で広く伝わっている。一部の同級生の家庭では、これらの事柄が非常に詳細に書き写されているという。しかし、真偽の程は不明である。情報の交換は基本的に同級生の家族間で手紙を通じて行われており、ここは情報が閉塞しているため、唯一の情報源は家族からの手紙だと言えるであろう⁹。

「流説」のレベルにとどまっているが、知青たちを興奮させるには十分な内容だった。彼らは公式の政策発表を待つと同時に、政策が正式に公布された際に即刻農場を離れるため、「先手を打つ」べくあらゆる方法に手を尽くした。

1978年8月頃になると、大規模なストライキなど組織的な集団抗議活動はまだ形成されていなかったが、すでに多くの知青が「休業」状態になっていた。この時の状況を、「青年思想」を担当していた陸融はこのように書いている。

先日、ここでは「頂替」「抽調」に関して討論がかなり激しく、人々の心境は不安定になっていた。一部の分場や生産隊の青年たちはもう仕事を止めて都市への帰還を待っていた。うちの「第一分場」は比較的に安定している方であったが、大きな影響も受けた¹⁰。

何の対応も得られなかったから、知青、特に基層の知青の希望は不安へと変わり、やがて怒りへと移っていった。自らが受けたさまざまな不公平な待遇と結びつけ、知青の丁惠民は10月16日、11月18日、12月7日にわたって鄧小平宛ての「連名書」を三通連続で起草し、「我們的的心声（私たちの心の声）」という散文

も書いた。

一部の積極的な知青活動家による密かなつながり、拡散、煽動を経て、「連名書」と「我們的的心声」はやがて西双版納農墾局所属の各国営農場全体に広まり、数千名の知青が署名して支持を表明した¹¹。

こうして、「雲南知青大返城」運動の幕が開いた。

2. 抗議の拡大

1978年10月31日から12月10日までの間、国務院は「第二回全国知青工作会議」（以下、「知青大会」）を主催し、「知青」の都市への帰還を議論した。会議の後、「全国知識青年上山下乡工作會議記要」以下、「記要」および「国務院関于知識青年上山下乡若干問題的試行規定」以下、「試行規定」という二つの文書が採択され、中央政治局の同意を経て、最終的に「中発〔1978〕74号文書」として全国に伝えられた。会議の決議は、一定の程度、知青の待遇を向上させ、知青の「返城」の制限を緩和する内容であったが、これらの政策は主に「挿隊（農村の生産隊に編入すること）」知青を対象としていた。当時、雲南の農場にいた知青は、政策上では国営農場の職員¹²とされており、そのため「74号」文書の大部分の政策からは利益を得ることができなかった。陸融は書簡の中でこの件についても言及している。

「試行規定」は計40条から成り、その内容は明確に述べられているが、我が国営農場の知青の根本的な利益に関わる規定は多くはない。主要なのは第15条と第16条であり、一つは「調工」（農場の知青が「頂替」だと呼ぶもの）に関するもの。もう一つは知青が結婚し家庭を持った後には、3回の帰省が認められるというものである。残りの大部分の規定は「挿隊」知青を対象としている。文書が伝達された後、ここでは大きな不満が生じた。「頂替」の条件を享受する一部の知青を除けば、ほとんどの知青は、長年の希望を打ち碎かれた¹³。

陸融が言及している「試行規定」の中で、農場の知青に関する第15条と第16条には以下の内容が含まれている。

①今後、一般的には「病退」や「困退」の手続きは行わない。ただし、家庭や本人に特別な困難がある場合には、組織を通じて協議し、適切なポストに

配属される際の待遇は、人事異動に従って処理される。労働力に余剰がある農場は、工業・鉱山企業と同様に、他の部門で人材が必要で増員指標がある場合には、労働力の調整が可能である。②「挿隊知青」への転入の手続きは、今後行わない。③農場外の青年と結婚する場合には、相手方の農村への定着することを許可し、条件を満たしていれば職員として採用することができる。農場に嫁いだ既婚の知識青年で、両親の住所から片道で500キロメートル以上離れている場合は、3回の交通費支援を受けることができる。その他、生活、労働保険、福利厚生などの待遇は、農場職員と同様である¹⁴。

このような規定により、多くの農場知青の「返城」の道は事実上閉ざされた。さらに、雲南農場の知青たちの不満の中で、特に重要なのは、兵団の改組後、多くの人々が「知青」という身分を剥奪され、「知青」としての権利を失いつつ、「知青」としてのアイデンティティを深刻に傷つけられたことである。劉小萌の研究によると、「1979年1月5日、中央調査団が雲南瑞麗農場で知青代表に中央の文書を伝える際、知青たちは『青年職員同志』と呼ばれたことに激怒し、感情がようやく落ち着きかけたところで、再びデモと抗議行動を組織した」（劉・定1995、45頁）。こうした背景から、知青のデモのスローガンには、「我々の戸籍を返せ、青春を返せ！」「我々は知青だ、農場職員じゃない！」という言葉が登場した。すべての原因は「中発〔1978〕74号文書」にあった（朱2011、376頁）。

1月6日、成都知青の葉楓の主導下に200人を超えた知青はハンガー・ストライキを開始した。断食が長引く中、多くの知青の健康は著しく悪化させていった。一部の人は意識を失ったが、彼らは医療介入を断固として拒絶した。

これらの極端な行動は、やがて上層部の注目を集めた。國務院は調査団を派遣し、現場に急ぎ赴き、情報を集める意向を知青に伝えた。同時に、調査団は彼らに断食を停止するよう要請した。1月10日、当時の国家農墾総局局長の趙凡是孟定農場に到着した際、面前で跪く知青の姿に直面し、直ちに四川省委書記の趙紫陽の意見を伝え、「知青たちの要求には希望があるが、党中央に問題を解決する時間を与えなければならない」と指摘した。趙凡是、後の回想録で次のように述べている。

私は当時62歳で、涙を流した。今日の出来事は、数人の悪党が煽り立てるようなものではない。彼らと接触しないで放置してはならない。直接対話することで、何が起きているのかを真に理解することができる（趙2000）。

一方、趙凡の発言にも関わらず、断食行動は収束しなかった。複数の知青グルー

ブが再度の断食を計画する中、葉楓は国务院の調整方針を信じるべきであり、解決のための適切な時機を待つべきであるとの立場を取った。彼はその後の回顧録で「この活発な議論は知青間の意見の不一致を示しているが、共通の目的のため、分裂を一時的に脇に置いて共同行動を模索する姿勢も見られた」と述べている(葉2011)。

実際には、一部の会議記録や先行研究から、当時の中国共産党上層部が知青問題に対して異なる立場を取っていたことがわかる。例として、鄧小平と趙凡は、積極的な対話を通じて問題を解決し、社会生産を迅速に回復させようとしていた。しかし、当時の最高指導者である華国鋒を含む一部のリーダーは、毛沢東時代の方針、いわゆる「兩個凡是(二つのすべて)¹⁵⁾」を堅持し、上山下郷政策を続けることを望んでいた。

明らかに、1978年において、長らく抑圧されてきた知青問題に直面した指導者間の政策論争は問題解決を加速させるどころか、知青の政府への信頼と期待を徐々に低下させ、双方の矛盾を深刻化させた。最終的に、選択を失った知青は、生存権を求めて最も極端で危険な行動に出ることとなった。

3. 陸融の「返城」の動機

陸融の「返城」の動機を分析する前に、彼について十分な理解を深める必要がある。

まず、陸融の性格に関して、彼の書簡と対話の経験から、彼は温和、克己、他者を思いやる「利他主義者」であり、自己の言動に対して常に慎重な態度を保持していたことを確認しておきたい。特に両親への書簡において、農場生活に関する部分は非常に慎重な口調であり、ましてや「返城」についてはなかった。

筆者は陸融へのインタビュー初めの質問は、「なぜ辺疆の雲南を『下郷』の目的地として選んだのか」であった。答えを聞く前、筆者は彼が農場に到着した後に書いた初めての手紙に書かれている「毛主席の指導に沿って、祖国の南の大門、『反帝反修¹⁶⁾』の前哨地——雲南へ行って一生革命をしよう!¹⁷⁾」のような答えを期待していた。これは、「知青」に対する一般的なイメージにも合致しているが、陸融の回答は筆者の予想以外のものであった。彼が雲南を選択した背景としては、以下の理由が挙げられ、

- ①雲南で親戚がいて、そのサポートがあったことである。
- ②雲南国営農場が軍隊に属することになれば、将来の安全が保証されることである。
- ③雲南の知青が得られる年40キロの米の配給が、上海住民にとって魅力的であったことである。この選択は自発的であり、強制を伴うものではなかった¹⁸⁾。

彼は「下郷」生涯ではほぼ毎年「先進」や「五好戦士」などの榮譽を受け、昇進も順調だった。1972年には「班長」、翌年には営部青年幹部、1974年には分場の共青团工作委員会書記、1975年には分場団委員副書記になっている。収入も一般労働者より多かった¹⁹。

これから見ると、多くの先行研究で指摘されている知青の「返城」の動機（例えば、農場の生活環境、知青の経済水準、社会的地位、結婚などの状況）は、陸融の事例に適用することが難しいようである。

1974年8月29日の手紙の中で、陸融は初めて「上山下郷」に対する不満を表現した。背景として、彼の親友であり同僚でもある姚仲利が同年の大学入学選考（1974年の大学入試は推薦制）で意外にも落第した。既に自分が合格したと考えていた姚は非常に失望し、一時は青年幹部としての仕事を辞めることを考えた。そこで、陸融は家族への手紙で姚の心境に対する理解を表現している。

正直に言って、ここでどんなに辛くても疲れても、5年、10年であれ鍛えることについては、私は何の文句も言わないと保証する。しかし、辺境で一生を過ごすということは、現在率直に言えば、私はまだそのような心の状態に達していない。そして、自分が将来、そのような状態に達することができるかどうか、非常に疑問を抱いている²⁰。

1973年に大学入学試験に失敗した陸融は、この時点で既に農場に留まる意義と自身の未来の人生の方向について考え始めていた。1974年9月には招工の噂が立ち始め、陸融の心をかき乱していた。

現在、様々な噂が流れており、今年の冬季には広範に招工が行われると言われている。兵団からは40%が選ばれ、「挿隊」からは60%が選ばれるという。皆が落ち着かない状態になっている²¹。

彼が「返城」に関連する話題について手紙で初めて本格的に言及したのは、1978年2月11日の書簡であり、それも彼自身の意志からではなく、恋人である劉萍²²が彼女の母親の手紙を通じて「頂替」という情報を得たことが理由であった。

先日、劉萍の母親から劉萍への手紙を見た。いま、上海では、親が工場で退職すると、その子供が「頂替」できるという「流説」がある。それ故、彼女は私たちに結婚を延期すると提案し、可能であれば、1980年に劉の母親が退職した後に劉萍が「頂替」し、その後で結婚するようにと言っている。私

たちはこれについて話し合い、もし双方の親の仕事を「頂替」することができれば、二年遅れて結婚することに問題はないと考えた²³。

なぜ「結婚延期」と「返城」が関係しているのかというと、1977年8月に公安部が公布した規定によって、「既婚」の「知青」は「返城」の機会がほぼないからである²⁴。劉萍の揺るぎない帰城の態度に対して、陸融は心の中で多くの不安を抱いた。

6年にわたる感情を抱いている私たちは、心から別れを惜しんでいる。夫婦が別々の場所に住み、2年に一度しか会えないのは、実に哀れな状況である。お互いに世話をすることができず、将来子供ができたとしたら、さらに困難が増す。一方、劉萍が言うには、「私が退職すれば上海に戻ることができる」とのことであるが、これは本当に笑える話だ。また、もし上海に戻ることができるのであれば、なぜ何千キロも離れた場所にいる恋人を探す必要があるのだろうか²⁵。

その後、陸融と劉萍は1978年3月から4月にかけて上海へ帰省し、休暇中に双方の両親と協議を重ねた結果、陸融と劉萍の結婚式を延期することを決定し、将来における「頂替」の可能性に備えることとした。

これによりわかるのは、陸融が最終的に「返城」を決定する上で重要な一助となったのは、劉萍の固い「返城」の決意であったということである。陸融には他にも「返城」の動機があったかもしれないが、少なくとも彼は劉萍を失うという結果を受け入れることができなかった。この点から見ると、陸融の「返城」の動機は丁惠民などの知青に比べて、やや「平凡」、或いは「普通」に見える。彼には驚天動地の叫びもなければ、国家や民族に対する大義も存在しない。しかし、この「普通」さこそが、筆者が価値あると考えている点であり、また、容易に見過ごされがちな「知識青年」の「青年」としての本質を示している。

II 農場からの脱出

1978年5月、陸融と劉萍は上海での休暇を終えて農場に戻り、家族と相談した計画に従って「頂替返城」を目指して各自努力を開始した。本節では、この時点から1978年末にかけて陸融が農場を離れるまでの書簡に焦点を当て、陸融の「返城」過程を詳細に再現することを試みる。

1. 「砂に水」：「返城」の試み

農場に戻った陸融は、「頂替」の行動へと急ぐことなく、むしろ冷静かつ着実に本来の業務に従事していた。彼自身の言葉を借りれば、政策がまだ固まっていない段階で、「返城」の意志を早まって明らかにすることは、不測の影響を招きかねないという慎重な判断からである。同僚たちが彼の未婚の状況を疑問視したが、彼は「返城」の真の思いを決して漏らすことはなかった。

私たちがこの度の帰省で結婚に至らなかったことは、分場や第七隊で広く知られている。人々が私たちの事情を尋ねてきた際、私たちの親はまだ私たちが若すぎると思っていて、晩婚を勧めているんだということにしていた²⁶。

陸融がすでに劉萍と共に上海へ戻るという決断を下していたとしても、彼の慎重な性格は変わらず、表面上は引き続き自分の仕事に努力に取り組んでいた。これに加えて、彼は田畑での労働もこなし、毎日遅くまで忙しく働いていた。

機関内では、各自に「幹部労働手冊」という手帳が配られ、毎日の記録を付けることが求められており、私たちには年間200日以上労働が要求されている。近頃は天気が良いため、主に耕地での草取り作業を行っている。労働の他にも、農場では最近、内部の「整風²⁷」作業が行われており、毎晩、生産隊でこの作業の責任を負っており、ほぼ22時半を過ぎてようやく休息を取ることができる²⁸。

陸融は自らの「返城」の意向を隠そうと努めていたが、他の知青たちはそうした配慮を欠いており、特に一部の下層の知青たちの「返城」への願望はすでに隠しようもなくなっていた。1978年5月11日には『光明日報』が当時の中央党校副校長である胡耀邦の「実践は真理を検証する唯一の標準」の記事を掲載し、社会に強烈な反響を呼び起こした。その後、鄧小平と多くの中央指導者の支持を受けて、「真理標準」問題に関する議論が全国で急速に展開されることとなった（劉2009）。この議論はただちに農場へと広がり、知青たちは「上山下郷」政策の破棄と国有農場の改革を求める声を高めていった。この状況下にあった陸融もまた、その影響を受けざるを得ず、「農場は常に言うことが多く、行うことが少ない。今となっては、それを根本から変えなければならない²⁹」と断言している。

しかし、民衆の強い要求があったにもかかわらず、また政策の議論が活発であったにもかかわらず、正式な文書はなかなか公布されなかった。そのため、陸融のように「返城」を決意している知青が実際に採ってる選択肢は非常に限られてい

た。陸融にとって唯一できることは、外出して会議に参加したり、集中学習の機会を利用して上層部のリーダーに政策の動向を探り、他の農場の代表と情報を交換し、その結果を整理して両親と対策を協議することであった。

私は（農場）党委書記と一緒に、生産隊に宿泊している。毎週金曜日の午後には、各地区の同志が一堂に会し、基層の動向を報告分析し、次週の業務を計画し整理する³⁰。

このような状態が続く中で、陸融が集めた情報は次第に増えていったが、真偽を見分けるのは一層難しくなっていた。農場の管理層は新しい仕事と目標を次々と設定し、陸融の焦慮は増すばかりであった。また、「青年思想」の責任者として、彼は毎日、知青たちの不平不満や政策に関する絶え間ない質問に応じる必要があった。皆は彼が政策の方向性を早く知ることができると信じていたが、彼自身も答えを持っていなかった。

「返城」を望む気持ちは依然として98%以上の青年に根付いていた。特に1976年以降、「病退」の手続きが停止しているため、皆の希望は「抽調」と「頂替」に託されていた。しかし、現時点で公式なニュースは未だになく、様々なうわさは混乱と不安を増幅させるばかりであった。運命を天に任せて、時が来るのをじっと待つしかない³¹。

2. 「運命の逆転」：家族の援助

正式文書の到来を長く待ち続けた陸融は、忍耐の限界を迎えていた。家族との連絡頻度が増え、ついには情報交換を急ぐために電報を多用するようになった。この時期、些細な噂でさえも彼の心境に大きな波紋を投げかけていた。例えば、1978年7月17日、父親から「頂替」対象外とされる四種類の人に関する情報を受け取った際、行政職の幹部である自身の立場に焦りを感じると同時に、父親の慰めを受け、心の準備をするよう促された³²。

この時期の陸融の書簡は、彼の心理的変容の過程をはっきりと映し出している。初期の優しさと楽観、前向きさが、迷いと焦燥、不安に取って代わられたのである。このような変容は、他の多くの知青にも見受けられる現象であろう。

多くの研究が「丁惠民による『連名書』の起草」を「雲南知青大返城」運動の始まりと位置付けているが、実際にはこの「知青のリーダー」が現れる数ヶ月前から、農場の知青集団は心理的な変化と不安、焦燥が積み重なるプロセスを経ていたのである。これは知青が長い間耐えてきた物理的および精神的な苦痛とは異

なり、短期間の感情の鬱積、目前にありながら手の届かない希望といった種類の焦燥である。特に、政府の態度の揺れと問題解決の不手際が、後に更に深刻な事態を引き起こす一因となった。

1978年9月15日の手紙で、陸融は西双版纳州農墾局の会議に参加した際に得た情報について言及している。その中には「抽調」などの政策も含まれていたが、より重要なのは知青の心理状態に関する言及である。

会議に参加した各農場の代表は、現在の「青年工作」の量が多く、様々な活動が展開しにくいと訴えている。年齢の増加とともに個人的な（婚姻）問題で悩んでいる人も多くなっている。特に男女青年の比率が大きく偏っており、これが数年間解決されていない主要な問題である。さらに、農場自体にも多くの問題が存在し、多くの青年は農場の発展速度に不満を持ち、自信を失っている³³。

この時の陸融自身は農場の幹部階級であったが、内心では農場への不満も大きかった。例えば、前述のように、管理層は目標を立てるだけで、具体的には実行されないということだった。

1978年10月23日、劉萍は家から「退職者の子供を雇用するための暫定的な規定」という草稿を受けた。これは正式な文書ではなく、官庁からも何の説明もなかった。この時点で、周りでは次々と同級生が「返城」に成功しており、更には1ヶ月以上も家族からの手紙や電報を受け取っていなかったため、ついにこの日、陸融の不安と不満が爆発した。

私は父、母に全力を尽くしてもらおうよう切にお願いした。自分も影響を心掛けつつ、最大限の努力をしている。8年以上もの間、お父さんお母さんを心配させないように、私は自分の心情に背って、できるだけ親に安心してもらえるよう努めてきた。これらの思いを打ち明ける唯一の目的は、可能な限りの状況で親に早急に方法を見つけてもらい、たとえ「頂替」の可能性が1%でも、100%の努力をしてもらいたいと願うからである³⁴。

この時点で陸融は、多くの知青と同様、「天命に任せる」状態にあり、自らの運命を選択する権利を失っていた。しかし、彼が幸運だったのは、家族からの強力なサポートを受けていた点だ。特権階級まではいかないものの、彼の家庭環境は多くの基層農村出身の知青よりもはるかに良好であった。父親は全民所有制工場の高級技術幹部であり、「頂替」の情報を入手するとすぐに陸融のために動き

始め、その上、絶え間ない励ましと慰めによって、陸融の心が折れることはなかった。そうでなければ、彼もまた、当時のストライキに参加していたかもしれない。

「陸融書簡」の中には、残念ながら陸融の両親が彼に宛てた手紙は一切収録されていない。したがって、両親が具体的に彼のために何をしたのかを知るには、陸融の返信から推測するしかない。1か月以上家族からの情報が途絶えていた陸融は、1978年10月31日によく父親からの手紙を受け取り、「頂替」が上海でまだ始まっていないことを知って、心の重荷が少し軽くなった。しかし、農場が「中央の公式文書が届くまで、頂替の手続きを一切行わない」という態度をとったため、不安に陥ることもあった。この時の陸融は、「知青大会」の決定と上海からのニュースをただ待つしかなかった。

新しい情報はすぐに届いた。11月17日、陸融は自分が「頂替返城」が可能になることを知った。この時点で「知青大会」はまだ終わっていなかったが、彼の返信から判断すると、「頂替返城」の方針はほぼ確定しており、最終的な審査と批准を待つだけであった。陸融の心はようやく安定し、自分の「返城」の意志を隠すことなく、農場内の「未婚」に関する一部の噂にも立ち向かうことができるようになった。

この度上海への休暇中に結婚しなかった真の理由について、リーダーたちは実は心の中でよく理解していた³⁵。

実際に「頂替」に関しては、陸融は表面上はあちこち走り回って情報を探っているが、彼の個人的な努力によってもたらされた効果は、上海の家族から届いた数言の情報に及ばなかった。通常の場合に青年幹部としての陸融は、農場や景洪農墾局のリーダーと接触する機会が多かったが、このような人間関係は陸融がより早く都市に帰るのを助けるどころか、彼にいくつかの障害と悩みをもたらした。最終的に彼が都市に戻れた主要な要因は、彼自身の家庭の出自と両親の努力であると言えよう。

Ⅲ 陸融の内面世界

「知青大返城」運動中、陸融の外面的な静けさとは裏腹に、内面では激しい感情の渦を巻き起こしていた。知青としての日々は、彼の人生観、価値観、さらには彼と他者との関係性にまで深く影響を与えていた。本節では、陸融が直面した葛藤、彼の心の軌跡、そして人間関係に焦点を当て、彼の内面世界を探求していく。水面下で揺れ動く彼の感情の波紋を追いながら、よりリアルな「知青像」を描き出

してみたい。

1. 家族

家族との感情の絆は、陸融にとって常に強固な心理的支えである。特に彼の知青としての生涯において、最初に雲南辺境へ行ってから上海への帰還まで、心理的な面でも実際的な面でも、家族との絆は陸融の内面的な動機付けの源だと言える。

陸融は、「文革」期間中に育てられた典型的な一世代を体現している。この世代は革命教育の影響を受け、自らの生命を大義に捧げる覚悟を持つという特徴があった。欧米の研究者（Chan1985）は彼らを「毛の子供たち」と呼んでいる。この世代は理想主義、英雄主義、愛国主義、集団主義、利他主義といった価値観と、伝統的な忠孝仁義という大義で教育されている（暁・郭1999）。しかし陸融との対話の中で、彼は筆者にいくつかの異なる見解を示した。

当時18歳に満たなかった自分が「忠孝仁義」のような抽象的で巨大な伝統的道德価値をどのように理解すればよいのか、何をしてよいのか、何ができるのかを知らず、唯一の初衷は「両親を心配させないという」ことだった（陸2023）。

「知青」としての陸融の経歴を考察すると、最初の農場離脱という欲求は「大学進学」を志向する先輩への羨望に端を発し、後に「返城」の願望へと変容している。彼の内面の欲求は如何に変化し、外的要因によって如何に変質していったのか。陸融は、「下郷」初期に新しい生活、「革命事業」に対して一時的に情熱を傾けていた。これにより、外部の観察者は「陸融の両親は、彼の人生がこの方向、つまり『扎根辺疆（辺疆に根を下ろす）』を望んでいるのだろうか」という疑問を抱くかもしれない。筆者もこの質問を陸融に投げかけたが、得られた答えは完全に逆であった。

ある時上海に休暇で行った際、母が語った話によれば、1970年に私と父が家を離れた後、街道事務所が家族へ向けて、国家建設への貢献として「知識青年」（私）と「技術幹部」（私の父）を輩出したことを称賛するため、赤い旗を家に贈った。これは玄関の目立つ位置に掲げられたが、人々が去った後、母は兄にそれを取り外させ、「これは見たくない」と言った（陸2023）。

陸融が母のこの回想をいつ聞いたのかは定かではないが、彼の両親が彼を雲南

に送り出すことを最初から望んでいなかったことは確かである。それでも、彼らはこの出来事を阻止することができず、ただ陸融が辺境で無事であることを心から願っていた。

陸融自身は手紙の中でこの件については一切触れていない。おそらく両親を悲しませたくなかったからか、あるいは自分自身にも選択の余地がなかったからか、彼はただ（両親が考える）良い方向に進むしかなかったのだろう。

筆者が推測するに、陸融が当時「良い方向」と捉えていたのは、「革命事業への積極的な参加」と「祖国の辺疆建設への貢献」であった。これは、陸融が農場で速やかに昇進できた一因であるとも言える。「農場での高い地位の役職にあっても、上海への帰還は実現せず、給与の増額は家族に対するわずかな安堵の源であった」（陸 2023）。陸融の言葉は、筆者のこうした視点を裏付けるものである。

このような意識は、「知青」の一般的な感情や価値観を示していると言える。家族への強い献身を背景に、彼ら「知青」の中には、伝統的な「成功」の概念を超え、家族中心の価値観を持つ者が多く存在している。魏瀾、張楽天の研究によると、「知青」の困難な環境での努力は、家族の幸福追求へと繋がっているという（魏・張 2021）。この洞察は、文革中の「知青」の経験を新たな視角から理解し、その時代の家族の役割と価値を詳しく探求する助けとなるだろう。また、この指摘は陸融の両親が比較的短い時間で彼の「頂替返城」の事を整えることができた理由も説明している。それは彼らの内心の深いところで長年抱いていた期待であり、希望が見えた瞬間には自然と全力で「頂替返城」取り組ませることになった。

2. 知青同僚

陸融は性格が明るく、農場での仕事に熱心に取り組んでいたため、地方での人間関係は常に良好であった。彼自身もこの事実をよく理解しており、両親に何度も手紙で報告し、同時に弟には人との付き合い方や忍耐力を身につけるよう教えていた。では、陸融と他者との関係性を通じて、彼の内面を深く探ることは可能だろうか。

前述の分析で述べたように、陸融は人間関係の面で非常に慎重であり、自身を危険な状況にさらすことは決してない人物である。加えて、「青年幹部」としての自己認識も強く、「知青大返城」運動の最中、彼はストライキやデモ、絶食といった抗議活動には一切参加しなかった。では、彼は抗議活動を行っている他の知青たちに対して、どのような態度を取っていたのだろうか。

現在、農場ではほんの一握りの知青だけが通常通りの業務をこなしており、95%以上の知青が公然と仕事を放棄し、丁惠民の「北上請願団」を支援して

いる。…私自身の意見としては、知青たちが直面している状況には深く共感し、同情してる。しかし、ストライキや請願を組織することについては、あまり効果があるとは思えない。私自身の立場からすると、もし誰かに問われたら、「私は参加しない」と答えるつもり³⁶。

インタビューの中で、筆者は陸融に対して「もし当時、陸さんが『頂替』を通じて上海に戻る事が不可能であると確定していたら、抗議活動に参加したかどうか」と質問した。この問いに対して、陸融はいつもようにすぐに答えることができず、しばらく考え込んだ。

実は、その問題については考えたことはありませんでした。大規模なストライキが始まった時点で、私はすでに「頂替」が可能であると確信していましたので、自分自身をそういった危険なことに巻き込むことはありませんでした。正直なところ、帰れない知青たちには深い同情を抱いています（陸2023）。

このように語った陸融に続いて、沈志明が横で補足した。

先頭に立って騒ぎを起こす知青の多くは、社会の底辺に位置する者であるか、何らかの処分を受けた者である。家庭の経済状態が少し良好な者は、このようなりスクを冒すことは少ない（沈2023）。

しかし、抗議活動を行っている知青たちと陸融は異なる点があった。それは彼が「青年幹部」であったことである。農場内の職階では「青年幹部」はそれほど高位ではないものの、政策や法規を具体的に実行し、基層の知青と直接向き合う役割を果たしていた。普段は上司からの指示に従いつつ、様々な知青の問題を処理する必要があった。そのため、陸融は抗議活動に参加することはおろか、知青たちの集会を阻止するよう要求される立場にあった。彼にできるのは沈黙を保ち、静かに自身の「頂替」の批准書を待つことだけで、「そうしないと、双方から非難されることになる³⁷」と彼は語っていた。

一方で、陸融の予想に反して、知青の抗議活動はすぐに効果を示した。多くの先行研究（張2008）にも記録されているように、中央調査団と西双版納農墾局の同意の下、1979年1月15日に農場で党委員会の拡大会議が開催され、農場に残っているすべての知青が「返城」を希望するならばそれを許可すると宣言された。さらに、「頂替」、「抽調」、「病退」などの手段で農場を離れることができなかつ

た知青のために、「退職」という選択肢が特別に設けられたのである。

大規模な知青の騒動は、知青問題を迅速かつ適切に解決する上で大きな促進効果を持っていたことが明らかである。多くの人々が長年にわたって帰城を望んできた願いが、今やようやく実現したと言えるだろう³⁸。

陸融は実際、自己の「知青」という身分に強い一体感を持っていた。彼は農場の指導者たちが問題に対処する方法や効率に大きな不満を有しているが、普段それを直接的に表現することはなく、上司に反抗することはおろか、意見を積極的に述べることもさえない慎重であった。しかし、手紙の中で彼が表明していたのは、自身が知青の側に立っているという立場であり、皆が安全に農場を離れることができるように願っていたのである。

「知青」としての陸融は非常に複雑な人物であり、彼を任意の既成のイメージで描写するのは難しい。外から見ると、彼は「優秀な」知青としてのすべての評価基準をほぼ満たしているかのように見える。具体的には、エネルギーで、能力があり、責任感が強く、人懐っこく、自己を厳しく律し、組織に忠実である。しかし、彼の内面は決して平穩ではなく、多くの行動が彼自身の意志に反している。例えば、彼は常に上海に戻りたいと思っているが、実際には農場で一生懸命に働いている。声を上げて抗議集団に加わりたいと思っているが、「身分」のために表現することができない。すべての「革命への忠誠」、「辺疆での建設活動への投身」も、単に親を安心させるためにすぎない。もちろん、これが陸融の全てでは決してない。しかしながら、たとえ部分的であるとはいえ、こうした分析は「雲南知青大返城」運動における知青個人像を豊かにするものである。

おわりに

1979年1月の下旬、既に「返城」許可を得ていた陸融は、慌てて上海に戻ることはなかった。なぜなら、「返城」政策が突如として緩和され、知青に数多くの新たな選択肢が提供されたからである。農場での最後の半月間、彼と劉萍は「頂替」べきか、それとも「退職」で直接上海に戻るべきかを真剣に考えていた。

これら二つの選択肢の違いは、「頂替」の場合は各レベルの政府組織の承認と審査を待たなければならず、その過程にはかなりの時間がかかる上に、「返城」の道が再び閉ざされるリスクがある。「退職」の場合は、農場で即座に承認され、知青たちはすぐに農場を離れることができるが、「工龄（勤続年数）」は引き継がれず、都市に戻った後の新しい職場も保障されない。

数十日間にわたる抗議活動を経験し、知青たちが涙を流し、跪き、絶食を行い、自傷する場面を目の当たりにした陸融は、実際には深い恐怖を感じていた。彼は、数万人の知青の努力によって勝ち取られた「返城」のチャンスが再び消えてしまうことを恐れていた。事実、多くの抗議活動に参加した知青たちは、1月15日の会議の後、すぐにすべての手続きを完了し、農場を離れた。その大多数は「頂替」資格を持っていなかったため、「退職」する以外に選択肢はなかった。しかし、どうやらそれは誰も気にしていないようだった。さらに、当時の中越国境は戦争の瀬戸際にあり、農場に残っている知青が前線に送られる可能性が高かったため、これが知青たちの「逃亡」を加速させることとなった。

1月の終わりになると、陸融が所属していた分場にはほとんど人がいなくなり、自分の同級生や8年間の戦友も全員ここを離れていた。「頂替」での帰城を決意した陸融は、依然として承認書類を待っていた。「空っぽの農場を前にして、間違いなく特別な虚しさと退屈を感じていた³⁹。」陸融自らも、8年以上に及ぶ知青としての厳しい日々が、このようにして幕を閉じるとは予想していなかったかもしれない。

「雲南知青大返城」運動は単なる集団抗議ではなく、個々の知青の葛藤と感情が交錯する複雑な現象である。陸融は抗議活動には参加していなかったが、抗議者たちと同じ訴えを持ち、抗議の知青を心理的に支持していった。そのため、ある程度、陸融も「沈黙の力」が「知青大返城」運動の一部になったと見なされるべきだ。陸融の内面世界の探求は、彼がどのように「知青」の身分と向き合い、それに同化していったかを示しており、これにより知青群体の多様性と内部の複雑性が浮かび上がってくる。

参考文献

- Chan, Anita (1985). *Children of Mao: Personality Development and Political Activism in the Red Guard Generation*. Seattle: University of Washington Press.
- David, Barton and Hall, Nigel (2000). *Letter Writing as a Social Practice*, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 鄧賢『中国知青夢』国防大学出版社、1996年。
- 莫里斯·哈布瓦赫(2002)『論集体記憶』(Halbwachs, Maurice. *Das kollektive Gedächtnis*, 1996. 畢然・郭金華訳) 上海人民出版社。
- 金大陸(2014)「知青下郷与返城：凸顯歷史的轉折」『探索与争鳴』第11期。
- 李巧寧(2006)「運命的抗争——知識青年回城心態分析」『石家莊經濟學院學報』第29卷第2号。
- 劉小萌(2009)『中国知青史：大潮(1966—1980年)』中国社会科学出版社。
- 劉小萌・定宜庄(1995)『中国知青事典』四川人民出版社。
- 陸融著(2009)『一个上海知青的223封家書』(沈志明編) 上海社会科学院出版社。
- 潘鳴嘯(2013)『失落的一代——中国上山下乡運動(1968-1980)·第二版』(Bonnin, Michel. *Generation perdue. Le 16ovement d'envoi des jeunes instruits a la campagne en chine, 1968-1980*, 2004. 欧陽因訳) 中国大百科全書出版社。

- 曉劍・郭小東（1999）『老三届——与共和国同行』中国文聯出版社。
- 魏瀾・張樂天（2021）「家庭本位的『関係』実践：私人書信中的家庭主義図像（1972-1995年）」『社会』第41巻第2号。
- 葉楓（2011）「個人回憶」（中共雲南省党史研究室編『雲南知識青年上山下郷運動』雲南大学出版社）。
- 張方旭（2018）「下郷与返城中知青対自我身分的建構——基于対西安19名知青的訪談」『中国青年研究』第8期。
- 張衛（2008）「記30年前知青大返城的肇始内幕并解析其成因」『南方週末』3月6日、D23版。
- 趙凡（2000）『憶征程』中国農業出版社。
- 朱薇薇編（2011）『八年：成都知青雲南支辺実録1971-1979』四川民族出版社。

注

- 1 「撥乱反正」は、毛沢東らによって引き起こされた文化大革命（1966-1976年）が終了した後、鄧小平らは文革の過ちを正し、当時の国内の混乱した状況を変え、国内の情勢を安定させるために一連の名誉回復と社会改革を行った。
- 2 「知識青年」（ちしきせいねん）、略して「知青」（ちせい）は1950年代に起源を持ち、最初は中央政府の呼びかけに応じて辺境地区を支援する「支辺青年」として指されていた。1966年の「文化大革命」とその後の「上山下郷」運動において、この語は約1600万とされる、農村や兵団農場へ「下郷」された中学・高校の卒業生を指すものとなった。本論文中の「知青」はこの特定のグループを指している。
- 3 「上山下郷」（じょうさんかきょう）、略して「下郷」（かきょう）。潘鳴嘯（2013）によれば、「下郷」という言葉は、1942年に中国共産党が延安に革命根拠地を築いた時から使用された。1955年、中共政府は都市の小学・中学の卒業生に「農村へ行く」、「下郷する」、「上山する」ことを呼びかけ始めて、そして1968年末から初中・高校の卒業生を農村へ向かわせる全国的な運動も「上山下郷運動」と呼ばれるようになった。本論文における「上山下郷」はこの1968年から1979年の期間の運動を指している。
- 4 「頂替」とは、従業員が退職した後、該当する子供1人（「下郷」したり、都市に滞在したり、都市に戻った「知青」、新卒の高校や中学の卒業生、または承認を受けて学校を中退した者を含む）がその仕事に就くことを指している（劉・定1995）。
- 5 現在の雲南省景洪市に位置する。
- 6 「走后門」は「コネを利用して、或いは不正な方法で目標を達成すること」の意味になる。
- 7 インタビュー対象者（沈志明）、調査実施日：2023年8月19日。
- 8 河北省承德地区安置弁公室「電話通知稿」1970年4月11日。
- 9 「陸融書簡」1978年7月2日付。
- 10 「陸融書簡」1978年8月8日付。
- 11 雲南省委弁公庁「情況彙報」第104期、1978年11月12日。
- 12 知青の処置について、國務院知青辦は1973年に四つの形式を規定している。①挿隊、②集団所有制の青年隊、③集団所有制の農場、④生産建設兵団及び国営農場。その中で「挿隊」は知青の主要な処置形式であった（劉1995）。しかし、1974年に雲南生産建設兵団が撤廃され、国営農場へと改組された後、当時、農場にいた知青はすべて国営農場の職員と見なされることとなった。
- 13 「陸融書簡」1979年1月8日付。
- 14 「國務院関于知識青年上山下郷若干問題的試行規定」、1978年12月。
- 15 「兩個凡是」、すなわち「すべての毛主席の決定は、我々は断固として守り、すべての毛主席の指示は、我々は終始変わらずに従う」。
- 16 「反帝反修」とは帝国主義と修正主義に対する反対の立場を示している。
- 17 「陸融書簡」1970年5月25日付。

- 18 インタビュー対象者（陸融）、調査実施日：2023年8月19日。
- 19 1973年、雲南省革命委員会第41号文書によれば、一般の知青労働者の月収は農工1級基準の26元であるとされている。一方、幹部（連級以上）は行政25級に位置づけられ、月収は42.5元である。陸融の月収は1975年2月以降、このレベルに達しており、更に「辺境補助」として毎月2元が加算されるため、彼の月給は既に一般の知青を上回っていたと言える。
- 20 「陸融書簡」1974年8月29日付。
- 21 「陸融書簡」1974年9月11日付。
- 22 劉萍は陸融の当時の恋人、二人は1979年に上海に帰ってから結婚した。
- 23 「陸融書簡」1978年2月11日付。
- 24 1977年8月、国務院は「公安部関于処理戸籍移動的規定」を承認・公布した。その中の第一条において、結婚した農村の人々（「上山下郷」運動に参加した「知青」を含む）は、農村で集団の生産労働に参加すべきであり、都市や町に移住することは許されないと規定された。また、そのような結婚をした者の子供たちも、農村での住居を取得すべきとされた。
- 25 「陸融書簡」1978年2月11日付。
- 26 「陸融書簡」1978年5月13日付。
- 27 「整風」とは、仕事のあり方やものごとの考え方を整えることで、中国共産党が生み出した政治運動の形式である。
- 28 「陸融書簡」1978年5月27日付。
- 29 「陸融書簡」1978年6月13日付。
- 30 「陸融書簡」1978年7月2日付。
- 31 「陸融書簡」1978年8月8日付。
- 32 「陸融書簡」1978年7月24日付。
- 33 「陸融書簡」1978年9月15日付。
- 34 「陸融書簡」1978年10月23日付。
- 35 「陸融書簡」1978年11月17日付。
- 36 「陸融書簡」1978年12月25日付。
- 37 「陸融書簡」1978年12月25日付。
- 38 「陸融書簡」1979年1月15日付。
- 39 「陸融書簡」1979年1月31日付。

Abstract

The Portrait of an Individual in the “Great Urban Return” Movement of Yunnan Educated Youths: Focusing on the Letters of Lu Rong as an “Educated Youth”

You YOU

This study delves into the “Great Urban Return” movement of educated youths in Yunnan, with a primary focus on the letters written by Lu Rong, an individual participant in the movement. While previous research predominantly characterizes the movement as a collective protest driven by a shared goal, resulting in a simplified and unified portrayal of educated youths, this paper seeks to provide a nuanced understanding by exploring the personal experiences and reflections of Lu Rong.

The first section of the paper outlines the background and the escalation of the protests, positioning Lu Rong’s motivations for ‘returning to the city’ within this broader context. Unlike other educated youths who were motivated by grand narratives, Lu Rong’s incentives appear more ‘ordinary’, yet this ordinariness provides a valuable perspective for understanding the essence of educated youths as individuals.

The second section retraces Lu Rong’s journey from leaving the farm to attempting to return to the city, highlighting the limitations of personal efforts compared to the effectiveness of family assistance. It underscores the external challenges and internal struggles he encountered, shedding light on the complexity of the ‘return to the city’ process.

In the third section, the paper explores Lu Rong’s inner world during the movement, revealing a turbulent emotional landscape beneath a calm exterior. It examines his internal conflicts, emotional trajectory, and relationships with

others, providing a comprehensive insight into the psychological dimensions of an educated youth's experience.

In conclusion, this study enriches the portrayal of individual educated youths in the “Great Urban Return” movement, moving beyond a one-dimensional narrative of collective protest. It emphasizes the importance of considering personal experiences and emotions in understanding historical movements, offering new perspectives for future research on the diverse experiences of educated youths. Additionally, it provides societal and historical insights into the roles of youth groups and the complexities of identity formation during significant periods of social transformation.

Keywords:

Zhiqing's great urban return, personal experiences, educated youths